Sr.エステル高林

Gail DeGeorgeの記事より抜粋

Sr.エステル高林和子

高校卒業後、19歳で倉敷の工場に送られたシスター高林は、母や兄弟が住む広島に原爆が投下されたとき、倉敷にいた。(父親は彼女が10歳の時に脳出血で亡くなっていた)。

8月7日に広島へ帰ろうと、列車で遠回りして市内へ。8月8日に到着した。駅もない、建物もない。兵士が道を切り開いている。「将校の奥さんで、きれいな人だったんでしょうけど、幽霊のような人だったんです。手に骨を持っていて、その人は自分の父親の骨だと言いました。」

彼女は母親を捜そうとした。母親は、後に爆心地となる場所に用事で行っていて、爆風で死んだのだろうと、後で聞いた。遺体は見つからなかった。

馬のようなむくんだ死体とすれ違った。線路沿いを歩いていると、家族を失って泣いている朝鮮人労働者にたくさん会った。西広島に着き、兄と合流した。

弟は、原爆で燃え盛る広島市街の火災を食い止めるため、家屋を壊す作業に出ていて負傷していた。丘の上の親戚の家に連れて行かれたが、医者には長蛇の列。シスター高林は弟と一緒に家に帰り、弟は8月11日に亡くなった。

「『死なないで、逝かないで』と言ったのですが、どんどん冷たくなっていきました」。

「死の体験そのものを忘れることができません。今でも、何かを感じています。」

数年後、高林さんは広島のカトリック校、ノートルダム清心中・高等学校で教鞭をとるようになった。

家族全員が仏教徒だったが、カテキズムを学ぼうと決心した。黙想会に参加し、1951年に洗礼を受け、1955年に修道院に入った。

自分の人生は神様にゆだねている。「私はすべてを神様に委ね、それが私の平安につながっています」とシスター高林は言う。

「毎日、テロなどの悲惨なニュースが流れています。信仰によって平和を得ることができます。」とシスター高林は言います。「ですが、世界には混乱があり、恐ろしいことが起こっているため、人々は信仰によって平和を得ることを忘れてしまっているのです。」